

# 上蔵砂防堰堤

中部地方の  
選奨土木遺産

令和元年度登録

所在地：長野県下伊那郡大鹿村 竣工年：本堰堤 1954（昭和29）年  
管理者：国土交通省天竜川上流河川事務所提供  
認定理由：花崗岩切石の丁寧な谷積による練石の構造にコンクリートを充填して、戦後まもなく全て人力で造られた大規模なアーチダムである。



上蔵砂防堰堤の下流側からの全景。高さ 23m の威容を誇る。

上蔵砂防堰堤がある小渋川は、日本有数の土砂生産量をもつ天竜川流域における主要な支流である。天竜川上流域は風化の著しい花崗岩や結晶片岩などの地質で、地形が急峻であり崩落地も多い特徴があるため、古くから砂防に対する意識が高いエリアであった。小渋川の砂防事業は、1933（昭和8）年より長野県により実施され、1937（昭和12）年には内務省直轄とされた。戦後には、さらに重点的な小渋川流域への砂防工事が計画され、その重要構造物として現在の上蔵砂防堰堤が建設省によって建設された。

1958（昭和33）年に河川砂防技術基準が策定されるよりも前の設計であり、また前例の少ないアーチ式を採用したため、当時の工学書や経験・知識に基づいて慎重にデザインされたものと考えられる。施工にあたっては、地元で調達された花崗岩などの建設材料を人力で運搬して、この巨大な構造物を建造した。堰堤外側に練石の谷積みで構造を作り、内側に粗石を配置してコンクリートが充填されている。竣工後も度重なる大規模災害を受け、本堤の修築、副ダムの嵩上げ、第2副ダムの建設、床固などを施し続けながら、今に至り機能している。



▲ 建設中の写真。石とコンクリートによる堰体の構造がわかる。



▲ 竣工直後の写真。下流側から見る。副ダムも本堤と同様に石積とコンクリートの構造体であったことが把握できるが、1967年に副ダムが3m嵩上げがされて現在の形になった。



▲ 鳥瞰的にみる現在の上蔵砂防堰堤と小渋川の流れ（左写真は下流側から、右上写真は上流側から。大量の土砂が堆積していることがわかる。本堤の銘板（右下写真）には「上蔵堰堤」と書かれている。

